

人文

No. 30

2008. 10. 1

富山大学人文学部同窓会

〒930-8555 富山市五福3190

電話 (076) 445-6143

FAX (076) 445-6141

E-mail alumnit@hmtu-toyama.ac.jp

題字 大島文雄先生

富山大学人文学部教授

神徳 昭甫

遙かなるサウス・ダコタ



◀ リトルビッグホーン・リヴァーの古戦場跡

1786年、ラコタ・スー族とシャインアン族の連合軍は、リトルビッグホーン・リヴァー（現モンタナ州）にてカスター將軍の第七騎兵隊と戦火を交え、これを全滅させた。

この広大な平野には、そのとき斃れたカスター他、210人が眠っている。

▼ ウーンディッド・ニーの虐殺跡

1890年、ゴーストダンスに集まったラコタ族250人余の老若男女を政府軍が無差別に虐殺した遺跡であり、彼らの霊を祀る墓地。1973年3月、ラコタの青年勇士数百名がこの地に立てこもり、合衆国政府に抗議して以後71日間、政府軍と攻防を繰り返した。



今年の総会では、国際文化比較論の神徳先生にご講演いただく予定です。先生がご訪問されたアメリカ・サウス・ダコタ州のスー（ラコタ）族居留地での知見をお話しいただきます。詳細は八ページにあります。多くの方のご参集をお待ちしています。

源氏物語の魅力を探る

―千年紀によせて―

中川 禎子 (9回国)

源氏物語をなんとか原文でよみ通してみたいという方々に誘われて、いつのまにか三十年、その節目に源氏物語千年紀に遭遇、今その営為をふり返りつつ、わたし流に、作品の魅力をたしかめてみたい。

源氏物語は「王朝の雅」を描いた作品だとよく云われる。

たしかに物語の第一部に登場する主人公光源氏は天皇の皇子として生れ、その容貌、学才すべての面に卓越した能力をもって、魅力あふれる女君たちと恋のアバンチュールを楽しみ、貴種流離譚という伝承の中で目も眩いばかりの栄華を実現し、准太上天皇として六条院に君臨する。

しかし物語は第二部、「若菜」の巻に至って暗転し、思いがけない展開をみせはじめる。

その発端をなしたのは女三宮の降嫁。

これをきっかけに磐石不動かと思われた光源氏の栄華の世界

は、人間苦が渦巻く修羅の様な世界に変わってゆく。

次の「柏木」の巻に描かれる当代随一の貴公子柏木の女三宮への哀切な慕情と身悶えるような調べは縹渺として「横笛」「鈴虫」へ。



ついで物語りは「御法」「幻」「雲隠」の巻を語るうちに、女主人公をつとめた紫の上の死を告げ、さらに光源氏の孤愁と寂寥にみちた晩年の姿と死を描き出してゆく。

「御法」の巻には激震にも似た女三宮降嫁の、その不気味な

余震におののきつつ、人の世の信じがたさ、むなしさ、寂しさに身を細らせつつ息をひきとってゆく紫の上の姿が哀切に描き出される。

時あたかも秋。季節の凋落のトーンを底にひびかせながら語られる彼女の呻吟、歎歎は千年の時空をこえて涙をさそい胸を打つ。

激震は震源であった光源氏をも深く残酷に襲う。

降嫁された女三宮と柏木との密通。屈辱と恥辱にみちたこの事件は、忘れ去ったかに見えたかつての藤壺との過去を呼び起し、宿命の罪業におののく光源氏の心のうちを容赦なく描いてみせる。

過去への懺悔と事件の隠蔽に腐心し、この苦汁をなめさせた柏木と女三宮への復讐。詳細にのべられる光源氏の心のうちは、どす黒く汚ならしく醜く陰湿で思わず目をそむけたくなる。

はたしてこれが「王朝の雅」なのだろうか。物語はあたかも「平成の現実」を語る様な迫力で、よむ者を圧倒してゆく。

続く第三部の終末宇治十帖に至って、二人の貴公子薫と匂宮

の間を浮遊するような、はかなげな女君浮舟を呼びよせて、作者はさらに思いがけない世界を描いてみせる。

彼女は二人の男君に愛されるという数奇な運命に逢着翻弄され、思いあまって宇治川に入水するも果せず、心ならずも蘇生し、ひとり己が半生を回顧し己が行末を模索し、あるべき道は出家のみと断じて自らの意思で出家を執行する。

苦しみ身に細らせつつも、遂にその苦しみの中で立往生するしかなかった紫の上の有り様をつき抜ける様にして、身の保全も庇護も断ち切って浮舟に出家の道を選ばせた作者の思いはどこにあったのだろうか。

ふり返ってみれば、日本の歴史は源氏物語成立以前すでに豊かな文化の沃土をもっていた。外来文化を十二分に咀嚼し、芸術にまで進化させた「かな文字」をツールとして「古今和歌集」にみられるような高度な文学的世界をもつくり上げ、さらに近代の私小説的な作品「蜻蛉日記」や「和泉式部日記」をも生みだしている。

そこに描かれる人生の不如意鬱屈した心情は、紫の上が最晩年に魂をしばらく出すようにして語った心情や、浮舟が男君たちから与えられる安穩や栄華をふり捨てても、自分自身の人生を生きたいと希求して出家にふみ切った心情に引きつがれているのではないだろうか。

物語第二部第三部の世界は、作者式部が彰子に仕えた女房―キャリア・ウーマンの経験をもふまえて見据えた冷徹な人間観察、思考から構想された人間ドラマだったのではないだろうか。千年紀を記念して華やかに展覧される雅な、「源氏絵」や美術工芸品の数々は、源氏物語の魅力を多面的に語り、知らしめるすばらしい企画ではある。が、ひょっとしてそれは作者式部の与り知らないことなのかもしれない。

二十世紀の最大の功績は源氏物語の「発見」であると言われるたある著名な文学者のことばが印象に残る。つまり源氏物語は千年を経てようやく「雅」の幻影をはなれて「真の文学」「世界文学」として認識されてきたということなのであろう。

源氏物語の魅力はまさにそこにこそあるのだと私は思う。

(朝日町在住)

人文学部の思い出

富山大学名誉教授 藤本幸夫



私は哲学の木下さんだけだった。人文学部のおおらかな、良き時代を省みたいと思う。

私は韓国に留学し、博士課程を終えて朝鮮語での就職の目的のたためまま、大阪大学文学部国語学講座の助手をしていた。

私は昭和五三年四月から平成一九年三月までの二九年間、人文学部の朝鮮語・朝鮮文学コースに奉職した。よく言われることであるが、過ぎれば早いものである。昭和五二年の改組により従来の文理学部が、人文学部と理学部に分かれた。文理学部の時には一五人前後であった人文系の教員が、改組によって四〇人ほどに増えた。大学の地理的条件や将来の東アジア重視性に思いを致し、東アジア重視を改組の中心に据えたとのことである。特に朝鮮やロシアを専攻対象とする講座やコースは、当時日本にほとんどなかった。

人文学部当初に集まった人々は停年を迎えたり、あるいは転出したりして、最後まで残ったの

先生からご要請があり、小生にとっては願ってもないことと有難く応じた。助教の小生の上には教授と言う段になって、困った。小生を含む数人が戦後の朝鮮語研究の初代で、その上は皆無に近かった。捜し求めた挙句、東京の中学校で理科の教諭であった梶井陟先生を迎えることになった。梶井先生は朝鮮人中学校に勤務されたのが契機となつて、民間の講習会などで朝鮮語を学ばれ、朝鮮文学関係のお仕事があった。

当時学生は二年生の秋から専門に進むことになっていたが、それから始めては遅いので四月に教養部の学生に呼びかけて朝鮮語を教え始めた。教養部には

朝鮮語がなかったため、数年間はそのような状態だった。学生は数人で、のんびりと家庭的な雰囲気であった。ところがカリキュラムは外国人講師の他、教員が四、五人いるコースと同じであつたため二人ではまかないきれず、学部のお計らいで当初毎年五人の講師を外から招いていた。いずれも研究の第一線に

誠実な人ほど追い込まれるという状況に立ち至っている。人文学の荒廃が目前にあるように思われる。

わが朝文の梶井先生が還暦過ぎて間もない昭和六三年九月九日に長逝され、大きな打撃を受けた。その蔵書はご遺族の好意で図書館に「梶井文庫」として

ある錚々たる方々であつた。他のコースでも数人の講師を招き、他大学との交流があつた。今省みれば良き時代であつた。冷房も暖房もなき時代であつたが、学生は今よりも生き生きしていたように思われる。教員も事務量が遥かに少なく、それぞれ自由に研究していた。人文学部発足当時は意欲のある人々が多くいた。若い人たちは酒を飲んだり花見をしたり、遊びもしたがよく勉強をした。夜十時頃まではたいい残り、徹夜もよくしていた。私は仕事柄全国を飛び廻っていたが、各地で人文の活躍ぶりに言及され誇らしかった。

収められた。今日、目録しがたいう書物が多く含まれている。図書館では寄贈書籍について、重複書は受け入れない、他書と混ぜて配架すると言う方針であつたが、朝鮮語に関する纏つた書籍群で稀観書も少なくないことを説き、「梶井文庫」として受け入れられることになった。ご遺族のご好意に報いるべく、研究室で『梶井文庫目録』を作ることとした。丁度コンピュータが普及し始めた頃で、学生の献身的協力を得、また下記油谷氏の作成したプログラムにより、学部の財政的支援の下に刊行し得た。梶井先生の後任として油谷幸利氏を迎えたが残念にも一年半で転出し、その後岸田文隆氏が赴任して七年余り在職した。

して学界で活躍している。私は人文学研究の基礎は書籍と考えているので、在任中書籍の収集に努めてきた。朝鮮語・朝鮮文学のみならず、広く朝鮮学を視野に置いた。必要に応じて中国学・日本学にも手を広げた。幸いなことにしばしば種々の科学研究費や民間の研究費に恵まれ、また韓国の諸機関のご好意により、他の朝鮮学を有する機関に殆ど遜色がない蔵書を揃え得たと思う。今後も益々充実させてもらいたいものである。

その時間を会議その他で多く奪われ、一方で業績を要求されるのであるから、今の研究者たちは誠に気の毒である。才能ある、

在職中に小生が責任者となつて、朝鮮学会・日本言語学会や日・韓国国際学会を開催した。多くの同僚や学生たちのご協力を得て成功裏に終えられたが、今もその時の事に言及されることがあり、富山大学に対する高評価を得られたと喜んでいる。昨年三月同僚のご配慮で、盛大な停年記念講演会とパーティを開いていたが、それを良き思い出に四月から千葉県の麗澤大学に奉職している。富山大学と人文学部に深い感謝を捧げ、益々のご発展を念じ上げて止まない次第である。(千葉県京柏市在住)

梨の白い花の咲く頃に集う

永井 宗聖 (6回史)



平成二十年五月富山駅北口に
人文学部同窓会の次のメンバー
十人が集合した。

今年松平君が当番で、呉羽
丘陵の「梨花見会」を開いた。
最初は富山市民俗民芸村にある
売薬資料館(写真)を見学した。
三〇〇年余の歴史をもつ「売薬」

高畑史子(3回・英文) 藤田正
時(4回・史学) 松平義麿(6
回・史学) 徳舛時治(6回・史
学) 石原常正(6回・史学) 北
條千恵子(6回・史学) 塚本協
子(6回・史学) 中川禎子(9
回・国文) 稲垣榮子(13回・史
学)と私である。史学科の6回

関係の史料を保存・活用するた
めに設置され、後輩の同窓生が
学芸員で、詳しく説明を受けた。
さて、昼食は呉羽丘陵の白い
花の咲く梨畑の中腹にあるイタ
リア料理の店でいただき、同窓

の思い出話しの花も咲いた。
午後は富山藩前田家のお墓が
ある長岡御廟を見学した。初代
藩主前田利次が一六七四年百塚
山築城中に死去し、二代正甫は
隣接する長岡に葬った。以来、
前田家十一代の墓が立ち並び、
参道には家老らの重臣が奉納し
た四七三の石灯籠があった。

卒業から五十年経った。数年
前から当番持ち廻りの一泊研修
旅行を行っている。一昨年は私
であると思う。

身近に在る史跡を、学生時代
を共にした同窓生と巡る愉しさを



は格別である。青春が甦る熱い
想い。「君も元気だったか。会
えて良かった!」と無性に嬉し
く懐かしさが溢れる。
梨畑の白い花が、それぞれの
人生を歩んで来た同窓生を労う
ように心を癒し、明日への励ま
しを与えてくれた。来年また会
おうと。
(黒部市在住)



研究室 歴史文化コース (西洋史)

准教授 川村 朋 貴

Ⅰマ帝国の時代から現代の冷
戦期にまで多岐にわたってい
ますが、他専攻・他学部・他
大学の諸先生方と協力しなが
ら指導しています。

卒業生のみなさまには、ま
すますお元気で過ごしのこ
とと拝察申し上げます。平成
十四年九月に東田雅博教授が
金沢大学に転出された後、私
が着任してもうすぐ五年にな
ります。その間、大学の法人化、
三大学の統合、人文学部の改
組等があり、西洋史研究室は
日本史、東洋史、考古学とと
もに構成する歴史文化コース
で西洋史分野の教育・研究を
担っています。平成十一年四
月から尽力されてきました小
林功准教授が立命館大学に転
出され、現在、私一人で研究
室を運営しています。



さまざまな制度的変化や担
当教員数の減少にもかかわらず、西洋史への学生の関心度
は非常に高く、今年度では新
二年生八名を加えて、三年生
十二名、四年生十二名、院生
一名の計三十三名が西洋史を学
んでいます。研究テーマは口

大学での素晴らしい出会い

鈴木 千明 (44回文化構造)



先日、本棚で平成三年二月九日の北日本新聞夕刊を見つけた。富山大学文学部推薦入学合格者が掲載されており、「自分の名前が新聞に載ることはこの先も滅多にないだろう」と記念に取っておいたものでした。

日焼けした新聞をめくり、当時のことを思い出しました。地元の国立大学合格に喜んだのも束の間、入学後は大学でやりたいことをなかなか見つけれず、一般教養課程の間はずっと悩んでいました。しかし文化構造論

(文構) コースで学ぶようになってからは大きく変わりました。文構では各自がテーマを自由に選び、研究していました。民俗学的なこと、心理学的なこと、社会学的なこと、文学的なこと

などテーマの幅はすいぶん広く、演習では友人たちの個性的な研究内容に感心しながら、その発表に聞き入っていました。私も英国紅茶の文化史というテーマをみつけることができました。小沢先生をはじめ、先生、先輩、友人、後輩に恵まれ、楽しくアットホームな雰囲気のコースでした。そうした人々の温かい励ましのおかげで、私は三年生修了後に一年間休学し、当時の夢だった日本語教師の助手として豪州に旅立つこともできました。新聞の合格発表に自分の名前が載ってから五年後、縁が合っ

の先輩も大勢おり、自分も同じ大学の卒業生でよかったと感じることが多々ありました。

結婚を機に、富山を離れて二年になります。文構の友人とは卒業して十年以上たった今もよく会っています。ことしの連休も仲間の結婚を祝って、小沢先生や先輩、後輩たち約二十人が集まりました。みんなが大学生気分に戻って夜中まで呑んで、話して、笑って、「人生の中で大事な四年間を富山大学で過ごせてよかった」とあらためて思うことができました。

(千葉県在住)



友人の結婚を祝って集まった文構の仲間。筆者は前列右端

研究室 歴史文化コース (考古学)

から

准教授 高橋 浩 二

卒業生の皆様、お変わりございませんでしょうか。考古学研究室は一九七九年の開設以来、今年で二十九年目をむかえました。卒業生と修了生の人数も二六〇名を越えました。最近では博物館や文化財行政等への就職が続いていますが、それでも考古学関係への就職者は、北海道から九州・沖縄までの約一五〇名に達しました。全国での卒業生の活躍にいつも勇気づけられています。

現在の考古学研究室は、日本史・東洋史・西洋史とともに歴史文化コースでの教育・研究を担っています。教員は私と、平成十四年十月着任の黒崎直教授の二名です。学生は二年生九名、三年生三名、四年生十名、大学院生二名の合計二十四名です。一時期に比べて学生数は減りましたが、野外調査活動等は相変わらず

精力的にすすめています。

まず、夏季の実習調査は、今年から福井県永平寺町の古墳に関する新たなプロジェクトが進行します。次に、春と秋には、南砺市教育委員会と協力して、二〇〇六年度から市内遺跡の分布調査を実施しています。そして、調査報告書は毎年二冊のペースで発行しています。この他、初夏の学外実地研修では、今年は山梨県の主要遺跡・博物館を巡検したところです。

卒業生の皆様と在学生との懇親の機会が少なく残念ですが、研究室や調査現場にぜひ足をお運びいただき、現在の仕事や研究活動、また学生時代の話などを聞かせたいと思います。



今更ながら振り出しから

田中

聡 (33回文化構造)
(専攻科13回人文)



文章を書くことを仕事にしています。今は、ある美術工芸作家の紹介を通じて美と人生について考える本を書いています。その作家は、「孤高の」という形容がぴったりな、凄まじいまでの力量を持ちながらも不遇な人生を送ってきた人です。作品のみならず、その美術論と不可分な本人の清々しい生き方に惚れこんで、ぜひともその人と作品についての本を書きたいと思ったのです。

ところが、この課題はもう何年も抱え込んでいて、わずかな部分を何十回も書き直したあげくに棄ててしまおうというようなことを繰り返しています。書くべきことははっきりしていて、内容も書ききれないほど用意できているのですが、どうしてもそうやってしまいます。内容についてでなく、書くということ

自体にここまで悩むのは初めてのような気がします。もう書けないのかなと思うこともしばしばですが、自分のなかで食い違っていることごとを一つ一つ認識させられる作業になっているのかもしれないとも思えます。

振り返れば、学生時代は文章を書くことが好きでした。けつこうたくさん書いたと思います。詩や小説、一番多かったのはそのときどきの思いや考えを書きつけただけの雑文で、だから他人に見せることはありませんでした。ただ書くということが楽しく、慰安でした。その楽しさは、しよせん自己表現レベルの快楽でしたから、書くことを職業としてからはおのずと薄れました。しかし、とくにそのための方法を工夫したわけでもなかったたので、今でもその楽しさの尻尾は残っていて、美というテーマはその甘さを少しも許してくれないようです。

また一方で書くことの愉悦は、手の運動にも結びついていて、それはキーボードで文字を打つようになってから失われていったものです。この面では逆に

んとか書く運動の楽しさを取り戻さないと、文章は意味に偏ってしまい身体性を持ってません。身の内に響かない文章は、これまた美というテーマからは容赦されないようです。でもパソコンで書くことに慣れて頭は、なかなか手書きの身に任せきれず、これもかなり厄介な課題になっています。

もともとは衛生や健康といった近代に特有な観念の成り立ちに知識社会学風なスタンスで取り組んでいて、その後、近代の身体観の周辺の諸観念の検討に進むつもりが、いつしか身体や感覚そのものを探求することの深みにはまってしまい、それが書くことの困難への入口になったのでした。美は、感覚体験のうちでも重要なものの一つとしてその延長上に現れたテーマでもあります。

このアプローチがミイラ採りがミイラになったように見えることは百も承知でしたが、より深いところで自らの観念的倒錯を見出し生命的な世界に近づくことだけが大事でした。学問や評論がそれをしないものなら、いつそトンデモさんであるほうがいいと思ったのです。

そうして、仕事の依頼はほとんどなくなりましたが、初めて芸術や文学の価値が理解できるようになった気がしました。というより、それまで何もわかつ

ていなかったということが分かっただけなのですが、それがなんと三十代も後半のことでした。あまりにも遅い目覚めです。にもかかわらず、それからなお逡巡し続けて、今日まで半端な場所をうろうろしてきたのですから、腹は据わらないにもほどがあります。あたりさわりのない仕事ばかりして、大切なテーマはみな後回しにしてきてしまいました。

これまで書きたいテーマはたくさんあったので、そのための資料をせっせと集めてきました。しよせん中途半端なものではありませんが、それなりに無理をして蒐集してきたのでしょつとは希少な資料もあるかと思っています。ですが今はそれらを凍結して、感覚的に言葉そのものの世界で戯れたり格闘したりしてみたい。そう思い、これからはノンフィクションから文芸に仕事をシフトしようかとも考えているのですが、思う矢先から、構想中の小説の舞台を近代に設定したためにまた新しく資料をかき集めています。必要には違いないのですが、構想ばかりが大きく膨らみ、すでに初志とは違う途を進みかけているようで、これまた前途が不穏です。

思えば、感覚の技法を文章作法として練り上げるような修業を何一つしないまま、書くことをなすりゆきまかせに職業として

きてしまった者としては、ここからで挫折そうになるのも当然なのかもしれません。

遅すぎー！と言われそうですが、そんなわけで今は、あいかわらず腹は据わらないままながらも、一からスタートするようになつています。これからどう生きていけばいいのかなあと、四十代半ばをこえてから悩むなんて情けないような気がします。が、まありストラの旺んな時代ですから、時勢にはあつていろいろです。

《田中聡氏主要著作目録》

怪異東京戸板がえし (評伝社)

ハラノムシ、笑う (河出書房新社)

なぜ太鼓腹は嫌われるようになったのか? (河出書房新社)

正露丸のラッパ (同)

衛生展覧会の欲望 (青弓社)

健康法と癒しの社会史 (同)

「超人」へのレッスン

(中央公論社)

怪物科学者の時代 (晶文社)

名所探訪地図から消えた東京遺産 (祥伝社)

ニッポン秘境館の謎 (晶文社)

人物探訪地図から消えた東京遺産 (祥伝社)

妖怪と怨霊の日本史 (集英社)

ことば日本史 (幻冬舎)

不安定だから強い (晶文社)

元祖探訪東京ことはじめ (祥伝社)

江戸の妖怪事件簿 (集英社)

鎌田元一先生を偲んで

斯波辰夫(26回史)

鎌田元一先生が、

二〇〇七年二月二日に逝去されました。

享年六〇歳、常に日本古代史学会をリードされてこられた先生は、もういらつしゃいません。



どうかを
検証する
というも
のでした。
まとも
に原史料

先生は一九七四年三月に京都

大学大学院文学研究科博士課程
国史学専攻を修了、同年に富山
大学文学部(一九七七年に人
文学部)に赴任されました。そ

の年の秋に私は専門課程に入り
ましたが、先生は一九八三年四
月に母校の京都大学に帰任され
るまでの九年間、私たち富山大
学生のご指導をなさ
いました。

当時、鎌田先生の研究室をお
尋ねしますと、先生はいつもマ
イクロ・フィルムをご覧になっ
ておられました。それは『続日
本紀』の写本のフィルムで、そ
の頃のご研究が後に『続日本紀
研究』という学術雑誌に発表さ
れた諸論文になっています。

先生が大学教員と
して最初に授業をさ
れたのが一九七五年
の古文書で、そこ
では早川庄八さんの「律
令太政官制の成立」
(坂本太郎さんの古
希記念論文集・上巻)
をテキストとされま
した。授業の内容は、

早川さんがその論文を書き上げ
たのと同じように、全ての引用
史料、全ての引用論文に当たり
果たして早川さんの説が妥当か
どうかを
検証する
というも
のでした。
まとも
に原史料

その時はつくづく自分の愚か
さを恥じ入りました。先生の論
文はとても難しく、当時の私に
は理解できなかったからです。

一九七八年に私が大阪市立大
学大学院の聴講生となり、改め
て先生の論文を拝読しました。
ただただ、先生のもの凄さに恐
れ入るばかりでした。
謹んで鎌田元一先生のご冥福
を、お祈り申し上げます。
(大阪在住)

吉田 清先生追悼

別本明夫(20回独)

去る五月十七日、富山大学名
誉教授吉田清先生が逝去されま
した。吉田先生は旧文学部文
学科ドイツ文学専攻第四回のこ
卒業の大先輩であり、わが同窓
会の会員でもありました。人文
学部在職中は同窓会の常任理
事として、行事の開催や事務的
な業務まで引き受けてくださり、
同窓会としてはひとかたならぬ
ご恩に与ったものです。

先生が富山大学に赴任された
昭和四十七年は、バリケード封
鎖や長いストによる混乱と荒廃
の痕が、ようやく学内の日常的

な光景から消えかろうとして
いる頃でした。卒業の見込みも
なく、相変わらず独文演習室に
出入りしていた私は、吉田先生
の授業にも出席させていただき、
表現主義の詩人ゲオルク・トラ
ークルの詩の講義やスイスの作
家イレミヤス・ゴットヘルフの
難解な方言が出てくる小説の講
読、専攻科ではグリルバルツァ
ーの『美学論』演習などを受講
いたしました。

先生の授業は一字一句も疎か
にせず、訳語の選択には和文と
して読むための細やかな配慮が
行き届き、しかもテキストの解
釈にあたっては文法の面でも厳
密に吟味がなされていて、どこ
か頑固な職人の技を連想される
ものでした。

いつ研究室に伺っても辞書や
本を見ておられ、それが求道者
の修行か祈りのイメージに重な
り、文学とはエンターテインメ
ントなどでは決してなく、矛盾
と苦悩に満ちた人間存在の真実
な姿を映すものだ、とのお考え
だったらしい先生の文学観、若
造の私にはやや古臭く感じられ
た文学観が、まずは弛まぬ研究
という実践でもって裏付けられ
ていることにすっかり敬服した
ものでした。

何かの折、たまたま雑談にな
って、先生は敗戦間際に召集さ
れ、ある大きなお寺で起居しな
がら出征前の戦闘訓練を数週間
受けていたが、結局は戦地に赴
くことはなかった、と語ってお
られたのを思い出します。その
お寺が今私の住む町の隣村にあ
るので、この話が強く印象に残
っています。そして、あの戦争
体験が、すでに漢字を修めた後、
文学への思い断ちがたく、戦後
あらためて独文専攻に進まれた
というご自身の決意とどう関係
するのか、もはやお訊ねするこ
ともできなくなってしまうまし
た。

独文ではコンパが盛り上がる
と、先生方も学生と一緒に歌を
うたわれ、吉田先生も毎回ドイ
ツリートか日本の歌曲をひとつ
ふたつ披露してくださったもの
です。そのときは普段の厳めし
さは失せて、じつに暢びやかな
声で楽しそうに歌っておられた
のを、今は懐かしく思い出すば
かりです。

あのときの暢然としたお姿の
まま至福の国にましますよう、
先生のご冥福を心よりお祈りい
たします。
(射水市在住)

平成20年度人文学部 総会へのお誘い

拝啓 涼秋の季節となりましたが、皆様にはご清祥のこととお慶び申し上げます。

さて、本年度も下記の要領で総会・講演並びに懇親会を開催いたします。

多数の皆様のご参加をいただきたくご案内申し上げます。

敬白

人文学部同窓会長 松平 義磨

日時 20年11月8日(土) 午後1時30分

場所 ボルファートとやま

(富山市奥田新町81 TEL 076-431-1113)

講演

講師 神徳 昭甫 教授

演題 遙かなるサウス・ダコタ

—アメリカ先住民探訪記—

昨年と今年の夏、それぞれ二週間ほど、アメリカ先住民の居留区を訪問した。サウス・ダコタ州に七箇所あるスー(ラコタ)族の居留地の中の二つ、パインリッジ保留区とローズバッド保留区である。

当地の宗教的指導者「メディスン・メン」(呪医)に面談して彼らの社会的な役割を知ること、およびこのラコタ社会でいまでも実践されているサンダンスやスエット・ロッジと呼ばれている儀式に参加して、その宗教生活の実態に触れることが訪問の目的であった。僅かな期間ながら、彼らの宗教について若干の感触を得たので、この場を借りて報告させていただくことにした。

懇親会：午後4時

会費：5000円(当日受付にてお納め下さい)

同封のはがき(現況通知・総会・懇親会出欠の回答)を10月24日(金)迄に是非ご返送願います。

同窓会連合会行事

「ホームカミング・デー」のご案内

同窓会長 松平義磨

富山大学同窓会連合会は、昨年十月六日(土)の設立総会を経てスタート致しました。

それを受け、本年度は十一月八日(土)に第一回ホームカミング・デーが実施されることとなりました。五福キャンパスでの

各学部の施設見学会を中心とする諸行事を通して、母校の現状に触れたり学部別同窓会の枠を超えた親睦を深めたりしていただくことがその趣旨です。

しかし残念なことは、開催の

日時が人文同窓会総会と全く一致したことです。人文同窓会では例年通りの十一月第二週土曜

日で諸準備が完了した段階であり、連合会の方の日時の変更を要望しましたが、大学当局の都合などの制約もあつて、今年はこの日時で実行せざるを得ないこととなりました。

本同窓会会員の皆さんには申し訳無く思いますが、同日は午前十時に共通教育一番教室に集合してご見学いただき、午後の人文同窓会総会に出席していただければ有り難いと思います。どうぞよろしくお願い致します。

浅野美和子氏(6回生)

『森陰にコグマを捨てて』で

第二十六回とやま文学賞(小説部門)を受賞されました。同賞

は富山県芸術文化協会がもうけた

賞で、受賞作

は同会発行の「とやま文学」第二十六号に掲載されました。



選者の木崎さと子氏は「老病の身にのしかかる母としての苦悩が、ほのかな希望を含む母性の博愛に転換していくあたり、主人公とともに作者は越え難い

人文学部教官異動

(平成20年3月)

○浜谷 正人(文化環境) 退官

○富田 正弘(歴史文化) 退官

年会費の報告

本年度の年会費状況をお知らせします。

平成19年6月1日～平成20年6月25日、388名(終身会費18名、年会費369名、その他)の方々から552,187円の年会費を納入していただきました。

ご支援ご協力、厚く御礼申し上げます。 人文同窓会事務局

一 訃 報

謹んでご冥福をお祈り致します

鎌田 元一(史学・教官)

平成19年2月2日

川本栄一郎(国語学・教官)

平成18年3月11日

須沼吉太郎(英文学・教官)

平成18年11月15日

長沼忠兵衛(史学・教官)

平成19年8月7日

西山 勤二(史学・教官)

平成17年12月

余川 文彦(独文・教官)

平成11年5月

吉田 清(独文・教官)

平成20年5月17日

小川 悦次(独文7)

平成17年11月

蟹谷 徹(国文3)

平成17年9月5日

西尾 裕子(東洋史40)

平成19年5月20日

松本 春美(英文13)

旧姓 野原

平成19年4月20日

水野 和子(史学15)

旧姓 大上

平成18年3月

車 益男(日本史28)

平成16年12月22日

前二十九号で間違いがありましたのでお詫びして訂正いたします。

宮島 遵瑠(哲学16)

湯上 友弘(史学4)

編集委員

稲垣 栄子 佐野 和美

志麻 愛子 田中 史子

成瀬裕美子 山藤 登